様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ０４４４３

研究課題名（和文）観光計画概念としてのスメルスケープに関する基礎的研究

研究課題名（英文）A sudy of smellscape as basic concept of tourism planning

研究代表者
橋本　俊哉（Hashimoto, Toshiya）

立教大学・観光学部・教授

研究者番号：５０２７７７３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「五感の体験」という観光が本来有する力を取り戻すべく、記憶や感情と密接に結びついている嗅覚が果たす役割、なかでも嗅覚的な体験の重要性を説く「スメルスケープ」の視点から、観光地空間整備に向けたソフト面の新たな計画手法を抽出することを目的としている。そのために、嗅覚体験に関する理論的検討、「香りのアート」の企画とその鑑賞者の意識調査による嗅覚の可能性の検討、そして沖縄の2島における現地調査を通じて「嗅覚的観光資源」を可視化する表現手法を考案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、嗅覚の視点から観光体験をとらえ直すという、これまで観光研究ではみられなかった視点からの研究成果である。視覚偏重型行為に意識が向けられがちな現代観光の課題に向き合い、観光体験を印象深くするために求められる手法としての学術的意義を有するものであり、新たな観光資源の発掘や既存観光地の新たな魅力創出など、ソフト面の観光計画に新たな視座を与える知見として、今後、観光地の空間整備において具体的な活用が期待される。こうした意味において、本研究成果は現代社会に生きる我々の持続的幸福度を高めることにつながる基礎研究として、社会的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：In order to regain the original power of tourism as a ``five-sensory experience,'' this research focused on the role played by the sense of smell, which is closely connected to memory and emotion, especially,`smellscape' that emphasizes the importance of olfactory experiences. From this perspective, the purpose of this research is to extract new planning methods from the soft side for the spatial development of tourist destinations. To this end, we will conduct a theoretical study on olfactory experiences, examine the possibilities of the sense of smell by planning ``fragrant art'' and surveying the awareness of its viewers, and visualize the method of expression of ``olfactory tourism resources'' through field surveys on two islands in Okinawa.

研究分野：観光学

キーワード：スメルスケープ　観光体験　香りのアート　「嗅覚的観光資源」　スメルカレンダー　スメルマップ
南大東島　西表島

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

近年，写真や動画で自分が伝えたいことを表現する SNS が急速に普及したことに呼応して，ライトアップイベントやフォトフレームなど，写真や動画で紹介されることを意識して観光地を飾り立てる例がみられるようになってきている。このように，写真や動画を「記録」して発信することに重きをおいた「視覚偏重型」行為に過度に意識が向けられると，せっかく観光者が実際に観光地を訪問したとしても，全感覚を駆使して印象深い体験をし，「記憶」に刻まれるような経験を重ねることは難しくなってしまう。このような現状から脱して五感の体験という観光本来の力を取り戻したいと考える。以上の問題意識をふまえ，本研究は，観光において視覚以外の知覚，とりわけ，記憶や感情と密接に結びついている「嗅覚」が果たす役割に着目したことが，研究開始当初の背景である。

周囲環境からの情報を受け取る感覚器官のうち，対象に直接接触することなく知覚する「遠感覚」には視覚，聴覚，嗅覚がある。視覚偏重になりやすかった反省から，聴覚については 1990 年代以降，わが国でも「サウンドスケープ」の概念が導入され，多様な活動が展開されてきたが，嗅覚に関しては，これまでほとんど観光研究の対象とみなされることはなかった。しかし嗅覚は，五感の中でもとくに記憶や感情と密接に結びついていることから，観光者の体験を印象深くする重要な役割を果たすと考えられるため，嗅覚の視点から環境体験を捉える「スメルスケープ」の概念に着目した研究に取り組むこととした。

２．研究の目的

本研究は，「五感の体験」という観光が本来有する力を取り戻すべく，五感の中でもとくに記憶や感情と密接に結びついている「嗅覚」が果たす役割に着目し，スメルスケープの視点から，嗅覚体験の特徴を分析し，その重要性と可能性について検討することを通して，観光地空間整備に向けたソフト面の新たな計画手法を抽出することを目的としている。

３．研究の方法

(1)においの知覚や嗅覚による記憶の特徴等に関する既存研究をふまえ，観光場面での嗅覚が，観光体験を印象的にする「なつかしさ」の想起に重要な役割を果たすことや，嗅覚体験を可視化することの重要性に関する理論的検討を行った。

(2)「香り」を活用したアート作品を創作し，鑑賞者に対して，展示作品を鑑賞することでいかなる記憶が呼び起こされたかについての意識調査を実施し，記述内容の分析を行うことで，観光を通じた嗅覚の可能性についての検討を行った。

(3)明確なにおい環境が把握しやすい空間特性を有する「島」に着目し，研究分担者が進めてきた資源調査の蓄積をふまえて島の「嗅覚的観光資源」の暦を作成し，住民に対する聞き取り調査を通じて精査することで，スメルカレンダーとして可視化する表現手法を考案した。

４．研究成果

(1)観光と嗅覚に関する理論的検討

嗅覚による知覚の特徴，嗅覚による記憶の特徴等をふまえ，観光における嗅覚体験の特徴を整理した。においの発生源となる「香源」には，自然資源・人文資源のみならず，記憶の中のにおいやイメージの中のにおいも，観光体験を豊かなものとするうえで重要である。このような嗅覚

の視点からみた観光資源を「嗅覚的観光資源」として類型化し，香源の季節性や行動主体と香源との距離関係等の視点から特徴分析を行い，嗅覚を観光資源として今後活用してゆく可能性についての検討を行った（引用文献①②)。

嗅覚という現地で体感することが欠かせない感覚を対象とした研究のため，とくに 2020 年度から 21 年度にかけて，新型コロナウイルス感染症の影響で現地調査が実施できない中で，どのような調査が進められるか，本プロジェクトのメンバーと定期的に協議しながら，(2)で紹介する「香りのアート」を始めとする調査内容の検討を進めてきた。

また，そのプロセスにおいて，直接見ることのできない「におい環境」をいかに可視化するかを優先課題とすることの重要性が明らかになり，それらに関する理論的･実証的な検討を行った。その成果を(3)において紹介する。

(2)「香りのアート」の企画と鑑賞者の意識調査

新型コロナウイルス感染症の影響で移動の制限が大きかった中で，2020 年 10 月，フランスの調査協力者の協力を得て，京都とフランス・エクサンプロヴァンスの「なつかしい」風景とともに，両地域にふさわしい「香り」を提示したアート作品を創作し，京都市で展示会を開催した。鑑賞者には，展示作品を鑑賞することでいかなる記憶が呼び起こされたかについての意識調査を実施し，思い浮かべた場所・時期と感想を自由に記述してもらったところ，多くの鑑賞者が，京都とエクサンプロヴァンスが作品のテーマであることを知っていながらも，香りや映像をきっかけとして，自分の過去の旅行や祖父母の家，なつかしい人々等，自らの体験にもとづくエピソード記憶を想起した。さらに興味深かったのは，「行ったことのない時空間」を想起した鑑賞者が少なからずいたことである。2020 年，新型コロナウイルスの影響でバーチャルガイドツアーが急速に広まった。エピソード記憶を思い出すときには，過去に戻って追体験している感覚・意識が起こる。香りを介したこの展示では，記憶を喚起し情動に働きかけることで想像性が刺激され，エピソード記憶にとどまらずに，空間的・時間的に自らの経験を超える「記憶」のひろがりがみられた（文献③)。2021 年 6 月には，聴覚と嗅覚を組み合わせた展覧会を企画して同様の調査を行っている（文献④)。これに関連した活動として，石垣島(沖縄県)において現地調査を行い，島の香りを活用したアート作品を制作する試みを行った。

嗅覚を活用した展示は，本人の経験したエピソード記憶や意味記憶にとどまらず，私たちをさらに過去へ，あるいは未来へと，時空を超越した「メンタル・タイムトラベル」へと誘う。アート体験のデジタル化が進むと，においは現実とヴァーチャルな世界へのスプリングボードとなり，他方ではリアル体験を補強するものとして機能することが期待される。こうした嗅覚を活用した「新たな旅」は，新型コロナウイルスの影響で新たな価値観が求められている観光において，大きな可能性を秘めている。

(3)「嗅覚的観光資源」を可視化する表現手法の考案

対人距離や景観観賞時の距離帯の分類を参考に，におい環境が，行動主体を中心とした 4 段階の層をなした距離帯から成ると想定した空間構造モデルを提起し，行動主体に近い順からそれぞれ「接香」「近香」「中香」「遠香」と命名した（表１)。におい環境は，これら 4 つの距離帯が重層性をなした構造となっており，季節や天候，香源そのもののにおいの強さ等の条件によって伸縮する柔軟性を有している点に特徴がある。観光地空間整備に向けた計画手法を抽出するにあたり，まずはこの空間構造を住民がどう認識しているかを把握し，可視化しうるかを優先課題として設定した。

表１　におい環境における空間構造

名称	入力 レトロネーザル	経路 オルソネーザル	匂い体験をもたらす空間の距離分類
「接香」	●	●	飲食の場でのにおい
「近香」		●	私的・永続的な生活空間（＝居住空間）とその周辺でのにおい
「中香」		●	地域の基調となる公共空間でのにおい
「遠香」		●	地域の「背景」となる、「気配」を感じさせる遠方からのにおい

におい環境はそこでの自然環境や生活文化が維持されることなしに維持されないため，自然と伝統的な生業や生活のシステムが維持されている「生産文化圏」は，におい環境の面でも資源に恵まれているものと考えられる。とくに島は，明確なにおい環境が把握しやすい空間特性を有しているため，におい環境の空間構造も把握しやすいと考えられる。そのため，研究分担者の真板と海津が 20 年以上にわたり島のエコツーリズム資源調査にかかわってきた調査経験と人的ネットワークをもつ沖縄県の 2 つの離島：南大東島と西表島を調査対象地として選定した。

南大東島はサトウキビ生産を柱とする農業と漁業の島で，製糖工場からの香りが島のにおい環境の重要な構成要素となり，八丈島からの移民と沖縄の文化が統合した独特の文化を有している。西表島は四季それぞれに移り変わる豊かな自然と共生しながら生活文化を築いてきた，国立公園内の世界自然遺産の島である。

本研究では，この長年にわたる資源調査の経験と成果の蓄積をベースとして，すでに把握している資源リストから嗅覚的観光資源を抽出し，季節ごとに整理した。それをもとに現地調査を実施し，島民に確認をとりながら修正・追加していく形式の聞き取り調査を行うことで，島の嗅覚的観光資源の種類や季節を精査し，空間構造モデルに沿って配置した「スメルカレンダー」を考案した（図１）。併せて，島民の話をもとに，島のどこで実際にそれらのにおいが体験できるかを地図に落とした「スメルマップ」を試作している（文献⑤）。

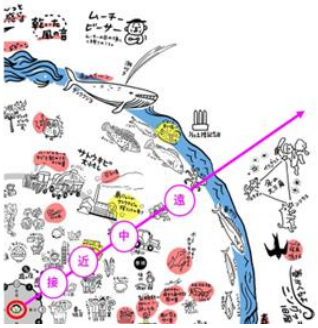

図１　南大東島で作成したスメルカレンダー（部分）

これらの調査を通して考案された嗅覚的観光資源を可視化する表現手法は，嗅覚の視点から観光体験をとらえ直すという，これまで観光研究ではみられなかった視点からの研究成果である。視覚偏重型行為に意識が向けられがちな現代観光の課題に向き合い，観光体験を印象深くするために求められる手法としての学術的意義を有するものであり，新たな観光資源の発掘や既

存観光地の新たな魅力創出など，ソフト面の観光計画に新たな視座を与える知見として，今後，観光地の空間整備において具体的な活用が期待される。

以上の成果は，国内学会での講演や報告（文献⑤⑥⑦），海外の学会での報告(文献⑧⑨)やアート作品展示（文献⑩），HP(文献⑪)等を通して公開され，オリジナリティに富んだ研究成果として高い関心を呼んでいる。

なお，本研究で検討してきた研究課題は，平成 6 年度からの基盤研究 B「「匂い環境」による観光体験の質的向上と観光地域計画への応用に関する研究」へと引き継がれている。

引用文献等

①橋本俊哉，観光における「嗅覚体験」に関する基礎的研究，立教大学観光学部紀要，23，2021，2-10

②橋本俊哉，「かおり風景 100 選」の特徴分析にみる「嗅覚的観光資源」の可能性，立教大学観光学部紀要，24，2022，2-9

③岩﨑陽子，におい・香りの展覧会報告「そらのにおい」，アロマリサーチ，88，2021，88

④岩﨑陽子，松本泰章，杉原百合子，中川晶，展覧会を宅配する―匂いの二つの効果，アートミーツケア，13，2022，17-35

⑤浜泰一，橋本俊哉，海津ゆりえ，真板昭夫，岩﨑陽子，南大東島におけるスメルスケープ・マップの作成，第 34 回日本環境教育学会大会（鳥取），2023

⑥橋本俊哉，観光と五感－スメルスケープ研究の視点から，日本観光研究学会会長記念講演，2023

⑦橋本俊哉，真板昭夫，海津ゆりえ，岩﨑陽子，浜泰一，日本観光研究学会第 38 回全国大会ワークショップ，2023

⑧ Yoko Iwasaki, Dorit Kluge, Toshiya Hashimoto, Yurie Kaizu, Akio Maita, *Smelling the Invisible: Multilayered sensory experiences in Tourism.*, Uncommon Senses IV, Concordia University, Montreal, 2023

⑨ Yoko Iwasaki, *Remini-scent*, Multisensory and Virtual Art Gallery, Uncommon Senses IV, Concordia University, Montreal, 2023, 3-6

⑩Yoko Iwasaki, *Remini-scent*, TRAVERTINE STUDIO VISIT, MARKETPLACE AND PANEL organized by Terry Carter, Travertine Atelier in L.A. United States, 2023

⑪http://olfactoryresearch.net/

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 橋本俊哉	４．巻 23
２．論文標題 観光における「嗅覚体験」に関する基礎的研究	５．発行年 2021年
３．雑誌名 立教大学観光学部紀要	６．最初と最後の頁 2,10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 橋本俊哉	４．巻 24
２．論文標題 「香り風景100選」の特徴分析にみる「嗅覚的観光資源」の可能性	５．発行年 2022年
３．雑誌名 立教大学観光学部紀要	６．最初と最後の頁 2,9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩﨑陽子	４．巻 262
２．論文標題 嗅覚再考ーどのように嗅ぎ、表現するかー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 美学	６．最初と最後の頁 83-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩﨑陽子	４．巻 88
２．論文標題 におい・香りの展覧会報告「そらのにおい」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アロマリサーチ	６．最初と最後の頁 88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩﨑陽子・松本泰章・杉原百合子・中川晶	4．巻 13
2．論文標題 展覧会を宅配する―匂いの二つの効果	5．発行年 2022年
3．雑誌名 アートミーツケア	6．最初と最後の頁 17,35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 杉原百合子・岩﨑陽子・松本泰章・真板昭夫	4．巻 23(2)
2．論文標題 匂いの提示方法の三要素	5．発行年 2022年
3．雑誌名 アロマリサーチ	6．最初と最後の頁 176,180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩﨑陽子・上田麻希	4．巻 23(4)
2．論文標題 嗅覚アート―嗅覚芸術の賞，Art and Olfaction Awardのもつ意義―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 アロマリサーチ	6．最初と最後の頁 346-351
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩﨑陽子・松本泰章・真板昭夫・橋本俊哉・海津ゆりえ	4．巻 46
2．論文標題 香りのアートによる時空の旅―ニュイ・ブランシュKYOTO2020関連企画omokage展―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 嵯峨美術大学紀要	6．最初と最後の頁 33,40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松本泰章・岩﨑陽子・真板昭夫・橋本俊哉・海津ゆりえ	4．巻 46
2．論文標題 展覧会報告「香りのアートによる時空の旅－ニュイ・ブランシュKYOTO2020関連企画omokage展－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 嵯峨美術大学紀要	6．最初と最後の頁 133,136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 橋本俊哉
2．発表標題 観光と五感ースメルスケープ研究の視点から
3．学会等名 日本観光研究学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 橋本俊哉・真板昭夫・海津ゆりえ・岩﨑陽子・浜泰一
2．発表標題 観光地における「におい環境」可視化の試み
3．学会等名 日本観光研究学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 浜泰一・橋本俊哉・海津ゆりえ・真板昭夫・岩﨑陽子
2．発表標題 南大東島におけるスメルスケープ・マップの作成
3．学会等名 日本環境教育学会
4．発表年 2023年

１．発表者名 岩﨑陽子
２．発表標題 嗅覚再考―どのように嗅ぎ、表現するか
３．学会等名 第339回美学会西部会
４．発表年 2022年

１．発表者名 岩﨑陽子
２．発表標題 においの美学とアート
３．学会等名 超域イノベーション博士課程プログラムグループ型自主活動支援企画（大阪大学）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yoko Iwasaki, Dorit Kluge Toshiya Hashimoto, Yurie Kaizu, Akio Maita
２．発表標題 Smelling the Invisible: Multilayered sensory experiences in Tourism.
３．学会等名 Uncommon Senses IV
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

olfactoryresearch.net http://olfactoryresearch.net/ Olfactory Art and Science Research https://www.olfactoryresearch.net/research

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	海津　ゆりえ (Kaizu Yurie) (20453441)	文教大学・国際学部・教授 (32408)	
研究分担者	岩崎　陽子 (Iwasaki Yoko) (70424992)	嵯峨美術短期大学・その他部局等・准教授 (44313)	
研究分担者	真板　昭夫 (Maita Akio) (80340537)	嵯峨美術大学・芸術学部・名誉教授 (34322)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	L'Atelier de Rosa Rose			
ドイツ	VICTORIA	International University		